

成果報告書

2023年 12月 28日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様
貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成		
研究および教育普及活動の期間	2023年4月 ～ 2023年12月		
フリガナ	ベニミュージアム		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	紅ミュージアム		
フリガナ	サワダ ハルコ	職名	
代表者名	澤田 晴子	館長	
フリガナ	ヤギハラ ミカ	職名	
担当者名	八木原 美佳	ミュージアムエドゥケーター	
所在地	東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	江戸時代の住空間を再現した体験展示におけるワークショップ実践とその考察	
	【目的】	江戸時代の町人が暮らす裏長屋をモデルに、朝と夜の照度を再現できる「体験型展示ディスプレイ」を制作し、当時の暮らしを体験するワークショップを小学生対象に実施した。参加者が江戸時代の明るさ／暗さに没入体験することで、自らの五感を通して当時の住空間を実感し、その環境に育まれた歴史文化の理解へと繋がることを目的とした。また、江戸時代の暮らしについて考えるグループワークを行うことで、新たな視点を得ることや、感想や疑問を共有することで、より自分たちに引き寄せて考えることも目的とした。	
	【実施体制】	体験型展示ディスプレイやワークショップの企画は、当館学芸員の助言を得ながら、当館エドゥケーターが行った。他館の長屋の再現展示を調査し、標準的な裏長屋の1/2を再現する形で展示制作会社に制作を依頼し、完成したディスプレイはワークショップ「江戸の朝、江戸の夜－明るさから考える昔のくらし－」で活用した。オリジナルイラストを使用したチラシは、港区教育委員会の協力を得て近隣の小学校に配布したほか、児童館・図書館等にも配架を依頼し、参加者を募った。	
	【実施方法】	ワークショップは7月21日と8月19日の2回実施し、合計15名の小学3～6年生が参加した。朝の照度の中で「化粧をする」、夜の照度の中で「本を読む」、「文字を書く」体験をする前半と、体験をもとに江戸時代の暮らしについて皆で考えるグループワークの後半で構成した。体験では、当館所蔵資料や、ワークショップのために収集した江戸時代の資料を活用し、没入感を得られるよう工夫した。グループワークでは、「みんなの家にあって、江戸時代の家にあるもの／ないものは？」等のテーマについて、体験やワークシートをもとに皆で考えた。	
	【成果と社会的効果】	「ワークショップに参加する前と後で『江戸時代』のイメージは変わりましたか？」という質問に対し、15人中12人が「変わった」と回答。長屋には風呂がないこと、便所が共同であることなどに驚き、「江戸時代に暮らすのは難しそう」等の意見があった一方、「昔は色々工夫して暮らしていたことに驚いた」、「予想以上に江戸の文字が見やすかった」など、当初のイメージより好転した感想も見受けられた。長屋という場で様々な実体験をすることで、イメージとは違う点も容易に受け入れ、新しい気付きを得るきっかけ作りができたと考える。	
共同研究者等の有無	なし ・ あり(人数 2名) 紅ミュージアム 学芸員 立川亜理沙 ・ 井上美奈子		
助成金額	50 万円	主な用途	空間ディスプレイに使用する備品費、運搬費 ワークショップ参加者募集チラシ印刷費、チラシ発送郵送料

研究室名 学会・博物館名	紅ミュージアム
テーマ	江戸時代の住空間を再現した体験展示におけるワークショップ実践とその考察
【目的】 江戸時代の職人や物売りなど町人が暮らす裏長屋をモデルとし、朝の外光が入る時間帯と夜の行灯等の灯りをともし時間帯、それぞれの照度を再現できる「体験型展示ディスプレイ」を制作した。そのディスプレイ内にて、夜も、昼と変わらぬ明るさが当たり前となっている現代の小学生を対象に、朝の照度の中で「化粧をする」、夜の照度の中で「本を読む」、「文字を書く」という江戸時代の暮らしを体験するワークショップを実施した。 参加者が江戸時代の明るさ／暗さに没入体験することで、自らの五感を通して当時の住空間を実感し、その環境に育まれた歴史文化の理解へと繋がることを目的とした。また、ワークショップの後半では、前半の体験やワークシートを参考に、江戸時代の暮らしについて参加者皆で考えるグループワークを行った。他者の意見に触れることで、新たな視点を得ることや、同世代の参加者と感想や疑問を共有することで、より自分たちに引き寄せて考えることもまた目的とした。 会場に体験型展示ディスプレイを設置した様子	
【実施体制】 体験型展示ディスプレイやそこで行うワークショップの企画は、当館学芸員の助言を得ながら、当館エドゥケーターが行った。ディスプレイの制作にあたっては、文献や深川江戸資料館等、他の博物館の長屋の再現展示を調査し、調査結果をもとに、多くの博物館・美術館におけるディスプレイ制作に実績がある展示制作会社に依頼し、江戸時代の標準的な裏長屋の1/2を再現したディスプレイを制作した。 制作したディスプレイは、夏休みこども自由研究2023「江戸の朝、江戸の夜－明るさから考える昔のくらし－」で活用した。参加者募集の際にはチラシを作成したが、江戸時代の暮らしを体験できるワクワク感に繋がるようなイラストをイラストレーターに依頼しオリジナルで制作し、チラシに使用した。 完成したチラシは港区教育委員会の協力を得て近隣の小学校に配布したほか、児童館・図書館等にも配架を依頼し、参加者を募った。 実施にあたっては、当館エドゥケーターが講師となり、朝と夜の照明切り替え、参加者の誘導等について他のスタッフの協力を得て開催した。 チラシ用に制作したオリジナルイラスト	
【実施方法】 「江戸の朝、江戸の夜－明るさから考える昔のくらし－」は夏休み中の7月21日と8月19日の2回実施し、合計15名の小学3～6年生が参加した。ワークショップは、ディスプレイの中で参加者がさまざまな体験をする前半と、体験をもとに江戸時代の暮らしについて皆で考えるグループワークの後半で構成した。参加者が長屋の住人の気分になれるよう、当館所蔵資料や、ワークショップのために収集した江戸時代の資料をできるだけ活用し、没入感を得られるよう工夫した。 前半の体験では、朝の照度の中で「化粧をする」、夜の照度の中で「本を読む」、「文字を書く」体験を行った。「化粧をする」では、江戸時代に作られた銅鏡と所蔵資料の鏡掛けを使用し、当館を運営している伊勢半本店製の伝統の紅「小町紅」を使用してお化粧の体験をした。また、夜の照度の中では、墨で書かれた江戸時代の算法書と、現代の印刷物の児童書を読み比べる「本を読む」体験と、墨で和紙に「文字を書く」体験をした。 後半のグループワークでは、「江戸時代のような、暗い夜をどのように過ごしますか？」「みんなの家にあって、江戸時代の家にあるもの／ないものは？」等のテーマについて、前半の体験や配布したワークシートをもとに皆で考えた。	

研究室名 学会・博物館名	紅ミュージアム
テーマ	江戸時代の住空間を再現した体験展示におけるワークショップ実践とその考察

【研究・教育普及活動の成果】

ワークショップ終了後の参加者アンケートでは、「ワークショップに参加して、楽しかったこと・おどろいたことなどを教えてください」という問いに対して、「家（長屋）の中に入って体験ができたのが楽しかった」などの「楽しかったこと」に関する回答以上に、「江戸時代の部屋が今と全然違い驚いた」、「家が小さいのに驚いた」など長屋自体に関すること、「江戸時代はロウソクを使っていたと思っていたが、行灯を使っていた」、「江戸時代の本が結構ふにゃふにゃだった（柔らかかった）」など体験に使用した道具に関すること、また「昔は季節によって時間の長さが違うこと」などグループワークで学んだことなど、さまざまな点について「驚いたこと」の回答が多かった。

また、「江戸時代の明るさ・暗さの中でいろいろな体験をした感想を教えてください」という問いには、「暗い中、本を読めるとは思わなくてびっくりした」や「予想以上に江戸の文字が見やすかった」という、仄かな灯りの中でも墨の文字が意外にも読めるという体験を通しての実感や、「江戸時代は電気がなかったので、ぼくの家よりはとても暗かった」や「改めて、LEDなど今のライトは明るいなと感じた」など、現代の自分たちの住環境と比較した感想などがあつた。一方、「夜は暗いから結構過ごすのが大変そうだなと思った」という意見ももちろんあつた。



朝の照度の中での「化粧をする」体験



夜の照度の中での「文字を書く」「本を読む」体験

「ワークショップに参加する前と後で『江戸時代』のイメージは変わりましたか？」という問いに対しては、15人中12人が「変わった」と回答。長屋には風呂がないこと、風呂に毎日はいらないこと、便所が共同であることなどに驚き、「江戸時代に暮らすのは難しそう」、「夜は暗いから過ごすのが大変そう」という意見があつた一方、「昔はいろいろと工夫して暮らしていたことに驚いた」、「江戸の人はもっと不便な生活で大変だと思っていた」、「予想以上に江戸の文字が見やすかった」、「好きになった」など、当初のイメージより好転した感想も見受けられた。

参加者はそれぞれ江戸時代に対するイメージをある程度もってワークショップに臨んでいたと思われるが、長屋という場でさまざまな実体験をすることで、イメージとは違う点も容易に受け入れ、新しい気づきを得られたのだと考えられる。



行灯の窓を開け、照度を上げて「本を読む」



グループワークの様子

江戸時代、例えば伊勢半本店が創業した文政8年（1825）は、江戸時代の後期と言えど今から約200年前のこと、子どもたちにとってはとても大昔のこと、自分たちとは全く繋がりのない時代と感じていたかもしれない。しかし、体験することで、当時の長屋の住人の暮らしや考え方に少し寄り添うことができ、考える視点や視線が変わったように感じられる。資料や説明に頼るのではなく、子どもたちの体験活動に重きを置き、そこから得た感想や疑問を共有し、派生した話題について話し合うことで、より江戸時代を身近に感じ、自分たちが生きる現代の暮らしに引き寄せて考えることができるようになったと思われる。

研究室名 学会・博物館名	紅ミュージアム
テーマ	江戸時代の住空間を再現した体験展示におけるワークショップ実践とその考察
【今後の成果の活用と活動の展開について】	
今回制作した体験型展示ディスプレイは、「明るさ」以外を切り口としたワークショップでも活用可能であると考えます。今回は子ども対象のワークショップで使用したが、大人を対象とした講座での活用も期待される。また、持ち運び可能な組み立て式のディスプレイであることから、紅ミュージアムと同様規模が小さなミュージアムや学校の授業などでの活用に展開できるよう、館の広報紙やウェブサイト、SNS等を使って発信するほか、博物館教育の研究会や学校の先生方との交流会で発表するなど、紹介をしていきたい。 紅ミュージアムは、常設展示にて紅づくりの技や紅にまつわる習俗、日本の化粧の歴史について展示をしているが、定期的に行っている講座では、それら展示内容に直接的に関わるテーマのほか、伝統工芸の技や日本の伝統色、江戸時代の人々の暮らしなど、間接的に関わる分野についても広くテーマとして取り上げている。一見、紅や化粧史に関係のないことでも、それらは緩やかに展示内容にリンクし、歴史を理解する上で欠かせない、その事象の背景やそれを取り巻く環境について知ることにつながる。そこに体験活動が加わると、よりイメージがしやすく、理解が深まることが今回のワークショップで明らかとなったので、今後も、制作した体験型展示ディスプレイを体験活動の場として積極的に活用していきたい。	